賞書

番匠川今昔物語（一）

―曽ての番匠川―

会員　池田円作

番匠川は源を因尾村（注、現本匠村因尾地区）に発し、中野村（注、現本匠村中野地区）で久留川を合せ、弥生町で井堰川を合流し、先覚者小林九左衛門の施行した小田井堰に溢れ、番匠部落の南を経て流れている県南第一の長流である。

且ては上荷の「たびや」こと宮崎佐市さんの裏近くまで上荷船がさかのぼり、問屋の木炭を積み離に下ったり、又はすぐ下流の土器屋坂本木炭問屋で船に炭を積んで、潮の満干に合わせて離に下る、これも仕事大事に考え呑気に気楽に暮した時代がかなり長くつづいた。

今豊南高校の運動場になっている天神津留の中須加は、桑畑や牛蒡畑で、品質のよい野菜が出来、福島渉さんへ長瀬の方、以下殆んど長瀬部落在住の方々）が耕作していた畑を越した川には、冬ともなると白魚の網代が数か所出来ていた。河野吉五郎さん、戸田文治さん、山田武吉さん等が、競って白魚をとったものである。中でも河野吉五郎さんの網代が最もよく白魚がとれ、一か年の生活費はこの網代から生まれ、常に羽織を着て呑気に暮して過ごせるとして「結構な男だ」と白魚とり仲間の評判となっていたという。

川野雄一さんの裏にも上荷船が着き、「定」と称する木炭問屋から、角石の渕につないである灘の上荷船に、男女が景気よく炭を運んでは積込んでいた。

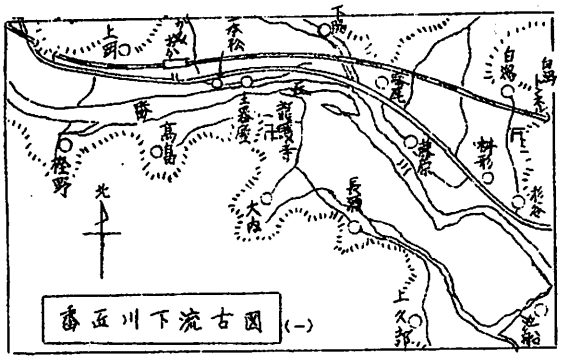
昔、ここ角石で客馬車の駐車場を経営していた川野袈裟蔵さんは、駐車場の跡に住居をかまえ、川岸には片山さんの家が、昔のままの姿を残してくれている。このあたり六七月の頃ともなると、馬の飼料にする古しろへ（芋植のすんだあとの古稚いも）を積んだ漁村の舟がついていた。すぐ近くの角石の渕には身投げ石があった。四百四病のやまいより、貧ほどつらいものはないと遺書を残して、入水自殺したものがあったとか。しかしその石は今は拡張されたバイパスの道路の下にかくれてしまった。

木炭商石田豊さん宅の裏はお作事浜と称し、昔藩公の船の建造や修繕の場所に充てられていた。このあたりはすみやき（注釣魚の名）がよく釣れ、夏は水泳の場として賑わい、そして上荷船も炭を積んでいた。

そのすぐ下、豊海の下には河野甚作さんの白魚網代があってよくとれた。岸には買手が寒風に吹かれながら並んでいた。白魚は風味卓越、無比の佐伯名物で、外来の客を通するにすぐ間に合い、格安でもあったのでよく売れた。

対岸の長瀬津留の堤防には五三竹が繁茂して竹藪をなし、長瀬部落がこれを管理し、六月頃には竹の子をとっては出荷したものである。

下流の札場（西田厳院前の石段のところ）は、対岸の長瀬渡しの



番匠川下流古図（一）

船着き場で、長瀬大根をはじめ野菜売りが往来していた。長瀬以外の人は片道一銭の渡し賃であった。この札場は昭和三年木立小学校に高等科が新設されるまで、生徒の舟着き場でもあった。舟は日曜日と洪水のときを除き、木立川を下り番匠川を遡ってこの札場に着いていた。

池船から長瀬津留に通ずるところに、長池橋というのが架り便利になって、長瀬渡しも省け、物資の運搬も車で池船橋にまわれるという便利さとなった。

龍護寺、大内、長瀬と三部落が水を集めた山の鼻の渕は、そこを基点にして上久部が前から大きく曲がり、今切れを経、池船を迂回して本流番匠川に注いでいる。この地に岩狩木炭問屋があり、灘の上荷舟の発着すること数多く、本流の岸辺には、花屋、ぼんざい、扇玉などの料理屋があって、対岸の池芳や豊海などの料理屋と呼応して三味の音も流れ、誰が唄うか佐伯小唄、

旅のつばめの唄から明ける
佐伯よいとこ花霞
朝日ほのぼのお城を染めりや
桜吹雪の、桜吹雪の夢ごこち
ヨイヨイヨイヤサノヨサホイホイ

昔なつかし道中姿
松に名残りの蝉しぐれ
鮎のしぶきに葦の葉ゆれて
虹がもえたつ　虹がもえたつ番匠川
ヨイヨイヨイヤサノヨサホイホイ

沖は夕映え港に帰る
夢は大漁の五丁市
伊予路はるばる灯台暮れりや
霧の水の子　霧の水の子灯がむせぶ

ヨイヨイヨイヤサノヨサホイホイ
浮かぶ島々ちらちら小雪
浜のだん竹つなぎ舟
磯も香るよ大入島に
啼いて千鳥は　啼いて千鳥は春を待つ
ヨイヨイヨイヤサノヨサホイホイ

池船橋は池船と船頭町を結ぶに必要な橋であった。昭和十八年の水害で橋は流失し、ただちに番匠川には渡し舟ができた。灘の上荷舟が船頭町の西野米穀店の下、浜丁の岸壁から人を乗せると、池船の扇玉料理店の川沿いの岸壁からも一艘出し、二艘の舟が交代で発着して便利を図った。もっとも堅田方面からの農産物を積んだ馬車、佐伯の町からタンス、長持などを積んだ馬車は、池船橋の出来るまでは止むなく、上手の土器屋と龍護寺の間の沈み橋を通って大まわりしていた。

船頭町浜丁の岸辺には、木立の土井と角道のおろし舟が沢山ついていた。土井の辨おいさん、おとき婆さんは腕がすぐれ、角道の板垣新助さんは確実で、客の人気があった。

吹、松浦、鮪浦、羽出のおろしもここに着いていた。特に盆と正月の買物客が浜を賑わした。柏江からのおろしも、柏江や津志河内、川原の人々を乗せてこの岸に着いていた。船頭は中島萬平さんと富尾伊太郎さんの二人で、富尾さんは玄米を精白して柏江で商っていた。

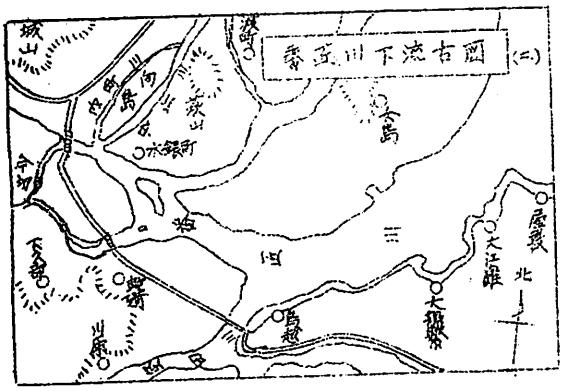
今切れを東に下れば、山ん田の渕に連する。ここには河童が棲んでおるとおどされ、子供達はおじけづき近づかなかった。その下流に蛇塚の渡し舟があり、蛇塚部落が出資して板橋をかけた。竣工式には上堅田村長川原衆蔵

さんが利帯したことも想い出される。

此の流れの本流が番匠川で久部津留に倫したところに山本恵志郎さんの白魚網代があり、川上五十米のところに桧垣正吉さんの網代があった。対岸の高俣に池田俊太郎さんの網代があり、その後方住吉神社の付近に松浦伊太郎さんの網代があり、肆をなして上る白魚の姿は、春の日射しをうけて野趣豊かな風景であった。佐伯名物白魚のおどり喰いを賞味する人も多いが、私の好きなのは白魚の炊き込み飯。特有なあの味は忘れ難い。

蛇浦の前には鵜鷺島があり、干潮時には引潮が渦をまいて船で通行するのは恐れられていた。下流の渕には三光丸が碇着していた。

番匠川の流域は肥沃にして、しけさえなければ農作物は豊作で、長瀬大根に久部牛蒡、蛇浦人参木立芋と云われ、女島長島は夏野菜の主産地で、茄子、胡瓜、南瓜、トマト、白菜、カンランなど、津久見から北九州に沢山出荷されていた。



ここ蛇浦の浜は岩ぜ(蟹)の釣場が多く、かつて小学生の頃先生からえさを頂まれて困ったこともあった。又ばら(鯛)やいな、ちぬが多く、瀬、木立の頃苗木、下堅田の鰯浦、宮浦の長瀬、蛇浦など、番匠川投網打ちが共同して、干潮時に網打船五十隻が二つにわかれ、せり、合いと云う漁法で番匠川独得の勇壮な見ものであった。ときたますずきが網をかぶりはねまわる様を見て、歓声をあげて騒いだ記憶もある。

下流、瀬の島越には、富士川丸、大船繋には神幸丸、芳吉丸、辰力丸が繋留されていた。潮時を利用した瀬の上荷取りが二挺櫓で、夫婦櫓をそろえ堅田踊りの音頭を口にしながら上り下りする姿は、一幅の絵であり詩であった。

瀬の分教場(註、今の瀬小学校の前身、今住宅になっている旧校舎)の前の川には吉川丸、三島には金内造船所が大きなドックを所有して、工員五十余人が待機して、千石積の機帆船を建造したり修理をしたり、佐伯屈指の造船所で、又俣蔵さんの時代から正巳さんの代まで、手広く作業していた。正巳さんは市会議員となり、河川改修には有力な発言をしていたが、先年物故された。

瀬のおろしは三丈の嘉太郎おいさんが得意のホラ貝を吹いて、東や島越の客を集めて運び、所からの買物を一手に引受けて、澄丁の米産萬力屋の乾物、松坂屋の塩をつんで帰った。被川丸が巨体を浮かべているのを見て、軍艦だと思ったのもこの近くの川であった。白水の造水地を「ざぶ」と呼び、鶴岡の豚屋や敢部落の農家の人がこの「ざぶ」を借りて、七島藺の苗を仕立てていた。

この白水に土地を所有する蛇浦の者が、毎年九月の頃水神祭りをして、いなの多い「ざぶ」に投網やいな突きを使用して魚を取り、酢醤油で食べ御神酒をあげ、のど自慢やかくし芸大会を楽しんでいた。白水の堤防には瀬の西の巣から渡し舟がつき、佐伯小学校の高等科の生徒(今で言へば鶴谷中学の生徒)が通っていた。下流の一の洲には青味を帯びた砂が波打際にあり、この砂が美しいから床の間の壁にぬられ、瀬の人が貝掘りに行き、海亀の卵さとりに行ったという。まるでお伽話を聞く様である。

御大典には難の青年が舞踊隊を組織して舟で出動して、ホーランエーヨイヤサノサッサの掛声も勇ましく、笛太鼓三味線に合わせて横踊をした。当時の歌詞の一節に

清き流れの番匠川　サノ番匠川
河口に開けし大江難トサイサイ　大江難

というのがあった。

昭和三年の夏のこと、恋に狂う若おいさんが、内縁の妻と二人の間に出来た子供や親戚の者五人を殺して、朝あらしで番匠川を下り、佐伯湾から御里四国に帰ったと噂され、警察の検べもはっきりせず、悲惨な事件の犯人も逮捕できず、海に死体もなく、主なき舟も見えず、恐怖に包まれながら今だに未解決のままである。

殺された人々は浜辺で警官立合のもとで死体を解剖し、葬式もすんだ四日後、新仏に燈明をあげ、淋しいのであかりも消さず寝に就いた夜半、火事となり、まだ若おいさんがおるとの噂が立ち、山狩までしたが手がかりは全くなかった。

そんな騒動があったのも、もう遠い過去のものとなってしまった。

番匠川は潮の干満が甚だしく、満潮のときは潮水が水門を越して水田に入り水稲が枯れ、干潮のときは難の沖に蛸を打ち貝を掘り、あおさ、あおのり、せみのり等をつみ、獲物が多かった。

潮時を計算することはなれたもので、朝月十五日は六時の満潮、五日、二十日は十時の満潮（凡て旧暦による）。これが基礎となる。例へば三日なら八倍して二十四、その四を更に六倍して二十四となる。即ち答は二時二十四分の満潮ということで、これを八六の法という。二十三日の場合は先ず二十を引き、三を八六の法を用いて時刻を算出して二時二十四分、それに基礎となる二十日十時を加算して十二時二十四分となる。これを私は近所の老人から教わった。

潮時をはかって晴天無風の日には、難家の民爺さんが番匠川の下流に漁に出かける。こんな日にはきまって大きなひらめ、赤えい、さざえ、づがに、とあたりなど獲物が多かった。この川には鮎、はぜ、鰻が多く、鰻の養殖を芳崎の清水由夫さんと難の佐藤京太郎さんが経営していた。

（つづく）

随想

早春遠近を歩く

会員　羽柴　弘

もう春である。はるかに仰ぎ見る春山は、うす紫にかすみ、あちこちの杉林は灰を霜にやけて赤茶けている。土堤道を辿れば、南向の斜面のつくしはもうたけてみずぼらしく、よく見れば焼跡には僅かに今年の草の芽がのぞいている。

歩くのは一年中で一番よい時である。

一月三十日　日曜日　前夜の雨は忘れたようにあがった。かねて念願の元越山に登ろうというわけである。浦代浜の旧トンネル口で待ち合せたら約二十名になった。

御案内は地元浦代の会員高宮氏。私たちは国木田独歩が一回目に登ったコースを選んだ。しばらくは道らしい道もない樹林や藪を歩いたが、やがて展根づたいの防火線に出て、登ったり降ったり僅かに造林に通う小路を踏